

これも歴史的人物の武勇はなし。これが義經の子供の時
さいふこは始めに云ふ必要なし。二つの名が出てくる
ミ、二人の異つた人物を思ひ易い。あく迄も牛若丸で通し、
牛若時代の勇しい活躍を話す。最後にこの人が大きくなつ
てから義經さいふ大將になつたを軽く云つておく位。

第十二週

皇太后様の御事

観
察

第九週

金魚

金魚の出盛りになつた。夏の景物として第一のものであ
り、全體子供のものである金魚は幼稚園に是非飼つて置き
度い第一のものであらう。

金魚の家系圖をこゝで詳しく言ふ必要は全然ないが私共
はごく常識として知つてゐてもよい。鮒から人爲淘汰によ

六月二十五日は、御誕辰の日である、前日に話す。

天皇陛下のお母様であらせられる事、明日は、御誕生日
でお祝ひの式がある事等。當幼稚園では、特に行啓があつ
たので、よく話しておく。委しい事は年長組で。

七匹の仔山羊

少し長いけれど、今迄に繪本などで讀んだり、きいたり
してゐるので、もう話してもいゝ。

つて作られたものである事は周知の事である。

年長組もなれば金魚屋を見に行くに面白い、これは言
ふ迄もなく社會觀察としての意味が加はる事になる。そ
すれば金魚の種類も澤山見る事が出来る。

飼ふ容器はやはりガラス鉢であらう。大きさは適宜さい
ふより仕方がないが形は四角が無難であり、明瞭に見るに
都合がいゝ、而し丸い鉢に飼つて大きく見えたり形が變つ

て見えたりする光學的ミ言へる面白さも亦決しておろそかに出来ない、がこれは年長組であらう。

金魚を買つてくる。子供達は金魚々々大さわぎ、こゝでまづみんなに手やその他何でも入れない事を約束させる事が大事である。そして口、腮、ひれの動きを観察させる。

そしたら金魚鉢のそばへ自由畫帖をもつて來させてかゝせるも面白いし、鉢仕事としてさせてもよい。金魚の觀察は決してこれ丈けに止らず、毎日餌をやる毎に、水を取り替へる毎に親しみ深くされねばならぬ。そこで餌であるが、春夏秋の頃は少量づゝ與へ、冬は一週間か十日に一度位にするかつをぶしの粉、パンの粉、ふなぎ腐敗する程水のにごる程やらない事で、時々はぼうふらの様な餌もやるこよい。水も大抵一日一回位とりかへる。それも全部でなくサイフォンを利用なごして半分位づゝかへてやる。又水草や藻は多すぎぬ位に入れてやるもよいがこれを入れた時は特に寄生蟲に注意しなければならぬ。金魚が元氣がなくなつたならひれに注意して見るこ平たい「てふ」さいふ蟲がついてゐる事がよくある。その時はその金魚を別の小さな容れ

物にうすい鹽水を作つて放してやれば蟲はされる。金魚にうすい鹽水はよく效く藥である。大體こんな注意をすれば大てい冬も越す事が出来るであらう。飼ふ金魚の種類は美しいひれを喜ばうとするこ弱いものが多いから注意を要する。何と言つても和金が一番丈夫である。

魚類(繪による)

誘導保育案で水族館をこしらへる事からなされる觀察である。繪による觀察に於ける注意は乗物の場合こ同様であるが、こゝではもう少し分化的意味を含めてもよい。その意味から可成り科學的に完全な繪を見せ度い。それは動きのあるものであつたら(泳いでゐる處の様な、標本的でない)尙よい。そして淡水魚と鹽水魚の區別(嚴密には言へぬ場合もあるが)は相當に明らかにし度いものである。

第十週

びわ、さくらんぼ

塗りゑに觀察させて塗るのである。この様な食べられるものは餘程注意しないこあるこごもが口へ入れてしまふ。入れさせ度くないものは一そうそこに充分氣をつけ度い。

これは色と数と形の観察である。

第十一週

ばら

ばらの垣根に一ぱい咲いたばら、一つ一つの花をそばへ寄つて香を樂しみ色をみせやう。小さいこの様な花を近づてぢつとみるこゝ、ゲーテの「荒野のばら」ではないが豊かな味ひのあるものである。その時同時にてんとう虫や蚜虫も観察させる事が出来る。

つばめ

雨上りの幼稚園の庭にぎうかしてすーつと二三羽のつばめが喜んで来た、皆が見てるでも、目にも止らぬ様に早い。これをぎうかしてはつきり見せ様としてあせつたりせず、自然に機會を待つて見せればよい。繪なごによつての概念的な観察はさけ度いものである。

第十二週

雨

こゝで始めて動植物でない自然観察が出てくる。雨の観

察……實に漠然としたものだと思はれるであらうが自然觀察といへば動植物に限るやうに考へられ勝ちであるがもつと身近な、こゝも言はれる氣象の變化に氣をつけ度いものである。事實、子供はぎうかするこぢつと空を眺めてゐる事がある。又ふと思ひついた様に「あの雲きれいだねなごと言ふ子供がある。いつであつたか」先生、富士山がさかさまゝ空を指して言ふので見るこゝ、青い空にはけ白い雲がちやうと富士山の形に浮んでゐた事があつた。こゝとした雲のゆきゝにも心をこめるゆゝりが何かあつていゝと思はれる。

この意味で雨の觀察は面白い。吟誦で雨をきく時、さんさんとお庭の青葉にそゞぐ雨を靜に眺めやう。何も説明しなくてもよい。子供も先生も自然に浮ぶ感興の、言葉があればそれはそれでいゝ。輪をかいて激しくそゞぐ雨、それが流れてゆく様子、見てゐるこ面白くてしぶきにぬれるのも忘れるであらう。

雨が止めば生きかへつた様に光つた木の葉、まぶしい空、木や建物の濃いかげ、そんなものゝ感を、一寸注意する事は望ましい。たゞ「いゝ氣持ね」と言つて空を仰いだだけで

もいゝと思ふ。「こんなに朝顔が伸びた」、「何の芽が伸びた」「さうしたものに寄せて雨上りの様子をよく感じる事

手 技

第九週

自由畫 ひなげし 一回

切り紙、ぬりゑ、なぎにて二三週前よりひなげしの觀察は幼児に度々くりかへされてゐるのであるから、自由畫としては容易に畫かれるのである。

粘土 いちご 一回

いちごを數粒落の葉なぎの上のせて幼児たちのテールのの上に用意する。幼児の觀察にまかせて、つくらせるのであるが、大體いちごの形をつくりヒゴや竹べラの先でボツボツ小さな穴をあけるこゝなぎ指導する。このいちごは乾かした後、エナメルや泥繪具をつけるとよい。粘土の色つけはどんな色でも最始白色にして、後にそのものゝ色をつける。

が出来る。

缺仕事 自在 一回

色紙だけ用意して幼児の自由につくらせる。

ぬりゑ ハナシヨウブ 一回

花菖蒲の實物を花瓶にさし、保育室におく。

製作 水族館の魚 二回

誘導保育案による水族館の製作

魚介類の繪本の觀察、魚屋の店頭にならぶ魚なぎの觀察、なぎ始めにして幼児自身に畫ける魚をかゝせる、自由畫にして始めはかゝせて、一尾一尾こしてはなしで魚らしく畫かれる様になつてからこれをきりぬかせる。年少組の極めて簡單なものであるから一枚の紙に裏表ともにかゝせる。二三尾つゞでも出来たものより糸で吊す。